

μ 's ic
story: From, Love
Live !

またたね

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

“音楽”。その世界観の中で、sメンバーとオリ主が織り成す恋の物語。短編集です。

各章毎にオリジナルの主人公が居ます。各章に、sメンバーは1人ずつしか登場しません。（例外あり）

目次

Super cell: ヒーロー

【高坂穂乃果】	ヒーロー#1		1
【高坂穂乃果】	ヒーロー#2		8
【高坂穂乃果】	ヒーロー#3		19

S u p e r c e l l : ヒーロー

【高坂穂乃果】 ヒーロー#1

もし何の力のない僕にでも

救える何かがあるとすれば

僕はその何かにとっての

“ヒーロー” になりたい



季節は残暑引きずる秋の始まり、東京都内のとある高校に通う僕は教室である一点を

遠くから眺めていた。

「綺麗だなあ……………」

眺めているのはそう、クラスーと言つても過言ではない美少女、高坂穂乃果ちゃんだ。

彼女は明るい性格で周囲を惹きつける魅力を放ち、男女両方から好かれる存在。

今彼女は昼休みでいつも一緒にいるメンバーで笑いながらお昼ご飯を食べている。

彼女の笑顔は光り輝いていて、まさに太陽のようで……

……おつと、穂乃果ちゃんの紹介ばかりで僕の話を全くしてなかったね。

僕の名前は佐伯春^{さえきはるいち}。

自分的にはいたって普通の高校一年生。でもクラスの中での立ち位置は……

「おい佐伯イ」

「……………」

ほら、来た。

いつものようにクラスの男子の1人が僕に声をかける。

「ちよつと売店でいちごオレ買ってきてくれない？俺喉が渴いちゃってさあ」

「……………わかつたよ」

「ありがとなあ、佐伯！あとでちゃんとお払うからよ！」

僕はそれ以上何も答えることなく席を立ち、1年生の教室からは結構離れている売店

へと向かう。

そんな僕をくすくすと笑う声が教室に響いていた。

そう、これが僕の日常。

決して目立った真似をしたわけでもない。

周りと必要異常に関わってきたわけでもない。

しかし僕は、クラスの男子からパシリ……もといイジメを受けている。

僕は他の男子に比べるとチビでのろまで力も弱い。格好のイジメの標的にされてしまった、というわけだ。

元来争いが嫌いな性格と、何事にも自信が出ない内気な心が災いして、嫌だと言いついでにされるがままになっている。

しかしどうしようもできないと諦めて、今の現状を受け入れる準備が出来てしまっている。僕はこの学校生活、ひたすら目立たないように寂しく生きてきた。

そんな僕の心の活力――

それが高坂穂乃果ちゃんなのだ。

彼女は容姿がいいだけではない。

楽しいときに友と笑い、悲しいときには友と泣き、友が不正をしようものなら、決してそれを許そうとはしない。

真っ直ぐで曇りのない、光のような明るい性格。

それはまるで――

僕が幼い頃から憧れた“ヒーロー”の世界に出てくるヒロインのようだった。

幼い頃から僕が心から愛しているもの……

それがマンガとアニメ。

宇宙から来た戦士、仮面をかぶったバイク乗り、カラフルに彩られた五人組。

僕はそんな“ヒーロー”に幼い頃から憧れ続けている。

幼い頃の将来の夢も“カッコいいヒーローになる”なんて書いてたっけ。

――でも、自覚してしまった。

自分はそんな器じゃない。

カッコよくなってなれないんだって。

顔もカッコよくなってない、背も低いし力も弱い。

そんな僕なんかじゃ――ヒーローにはなれない。

そう悟った僕は、その悲しみを紛らわすように、絵を描き続けている。自分の思い描いた、理想のヒーロー像を。

昼休み終了間際、僕は教室へと戻りさっきの男子生徒へと買ってきたものを渡した。

「はいコレ」

「おっそいんだよ佐伯！……つてこれコーヒー牛乳じゃねえか！おれいちごオレ頼んだだけど」

「売店閉まる直前だったから売り切れてた。

「変わりに買ってきたんだけどダメだった？」

「はあ……つたくしよすがねえなあ飲んでやるよ。ありがたく思えよ？いちごオレ買つてこれなかったからお前の奢りな！」

「……わかったよ」

「はははと笑うそのクラスメイトに背を向け、僕は窓際が一番後ろ……自分の席へと戻る。」

そして鳴り響くチャイム。五限目の数学の開始時刻だ。

始まった授業をノートにペンを走らせて板書を取る——フリをしながら

僕はノートに“ヒーロー”を描いていた。

これも僕の日常。

授業は基本聞いたフリでやり過ごし、ノートに絵を描くか……穂乃果ちゃんを眺めるか

どっちかだ。

5時間目、彼女は高確率で居眠りをしてしまう。

それが数学なら確率は100%となり——

パシン！

先生に教科書で頭を叩かれる。

そして穂乃果ちゃんは反省の色を見せずえへへと笑うのだ。周りもそれにつられて笑う。

うん、やつぱり穂乃果ちゃんは可愛い。

……あ、別に僕はストーカーじゃないよ？

可愛い子……好きな子をちょっと見てしまうだけでそれを自分のものにしたくないなんてことは全く考えてないからね。

穂乃果ちゃんを僕のものにしたいだなんて……

高望みしすぎだ。僕にとって穂乃果ちゃんは高嶺の花。触れることはおろか話しかけることすらも畏れ多い。

僕はただ——彼女という“ヒロイン”を眺められていけば、それでいいんだか

ら。

こんな日々が入学してから秋までずっと続いている。

僕の日常をつまらない、味気ないという人もいるだろう。でも僕は満足なんだ。

僕みたいな人間には、これくらいでぴったりだ。

でもこの時の僕は知らなかった。

僕に訪れる“奇跡”を。

これはそんな弱い僕と、“太陽のヒロイン”の物語。

【高坂穂乃果】ヒーロー#2

【高坂穂乃果】ヒーロー#2

この出会いはきっと偶然なんかじゃなくて

たとえ何億年、何万光年離れていても

どんな障害があつたとしても

僕はそれを乗り越えて

君を守りたい



僕の日常には変化なんてものはない。

ただただいつも通り、楽しくもなんともない学校生活を送り、家に帰ってご飯を食べ、風呂に入って寝て起きて学校へ……

このルーティーンを機械のようにこなす。

それが僕に与えられた使命なんだと、そう思っていた。

しかし今日――

その日常は脆くも崩れ去る。

ある日の昼休み。

僕はいつものように一人で昼ご飯を食べながら、

皆で楽しそうに話している穂乃果ちゃんを遠くから見ている。やっぱり穂乃果ちゃんは可愛い。見てるだけで元気が出てくるなあ。

しかし――

何やら穂乃果ちゃん達とは違うグループの女子がチラチラとこちらを見ている……
そして僕の方を見ながらヒソヒソと何かを囁いている。ここからでは何を言っているかはわからないが……大方いつもみたいに僕の陰口かな。

いいよ、もう。慣れっこだから。

自分の心にそう言い聞かせる。

忘れてしまおう。その方が自分のためだから。

でもそうするたびに――

胸は張り裂けそうになる。

そしてその女子生徒達は椅子から立ち上がり……僕の方へと歩み寄ってきた。

「……な、なんです……か……?」

「――さっきからアタシのことジロジロ見てるでしょ」

はア?

と声を出さなかった僕を褒めて欲しい。

何を言っているんだろう。

「……どういふことですか?」

「とぼけないで。さっきからずっとこっち見て何? 気味悪いんだけど」

「ホントありえない、サイテー」

「謝つてよ」

「ぼ、僕は別に別にそんなつもりじゃ……」

「言い逃れするわけ？ マジキモいんだけど」

「調子乗んなよ変態」

「近づかないでくれる？」

——ネクラさん

フツ、と自嘲的な笑みが漏れる。

ここまで言うか。

別に僕はこの人たちを見てたわけでもないし、

それでいやらしい事を考えていたわけじゃない。

僕が君たちに何をした？

どうしてこんなにかたいことを言われなきやならない。

この容姿みたくれか。

この性格か。

僕の全てか。

何が悪いんだ。教えてくれよ。

「すみませんでした」

でも僕は全ての理不尽を堪えて、頭を下げた。

「やつと認めたらよ、このネクラ」

「次は先生にチクるからね」

そう言っつて女子生徒達は元の場所へと戻っていった。

僕は机の下で拳を強く握りしめ、下げた頭に携えた表情は涙を堪えて唇を噛み締めていた。

悔しい。辛い。苦しい。

なんで僕が……どうして。

しかし次の瞬間呼びかけられた声は――

「大丈夫？」

僕はその声に顔を上げる。

そして目の前には――

「高坂……さん……」

穂乃果ちゃんがいた。

「色々言われてたみたいだけど……何かあったの？」

あの穂乃果ちゃんが、僕に話しかけてくれている。

体の底から熱を感じる。

今までに感じたことのないような高揚感。

その昂りを悟られないようにしながら、僕は穂乃果ちゃんの問いに答えた。

「……僕があの人たちを変な眼で見てたって……」

言いがかりをつけられて……」

「ああ、なるほど……あの子達、本当は悪い人じゃないんだ。きっと多分、ストレスとかが溜まってて、イライラしてたんじゃないかって……だから、あの子達を悪く思わないであげてくれないかな？」

謝るのは、穂乃果からするから。

――「ごめんなさい」

穂乃果ちゃんが僕に頭を下げた。

やっぱり穂乃果ちゃんは優しい。友達を庇い、自らが泥を被ろうとしている。

「とんでもない。顔あげてよ高坂さん。僕は気にしてないからさ」

「ほんと？よかつたあ……」

僕が嗜めると、穂乃果ちゃんは心の底から安堵した表情をした。

しかし穂乃果ちゃんは、ここで1つの爆弾を投入する。

「……ねえ、それで1つ質問なんだけど……」

「……ん？なにかな？」

「勘違いならいいんだけど……」

「——さつき穂乃果のこと、見てなかった？」

「……………」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ

……

ポーカーフェイスを装っていたが、僕の心は大荒れ模様だ。

き、気づかれてた…!? 本人に!?
どどどどうしよう……………

……嘘は、よくないよね……。

何より好きな人に、嘘をつきたくはない。

「——うん、見てた、よ……」

終わった、かな……………

僕の淡い恋は、本人にバレるといふ最悪な形で終わりを告げることになるなんて。
しかし穂乃果ちゃんの返事は予想外のもので。

「やっぱりー! 穂乃果も君のこと見てたんだよ!」

「……………はい?」

たっぷり10秒ほど静止してしまった。

今、なんて……………?

「穂乃果、ずっと君のこと見てたの!」

君と話したいことがあったんだー!

君もそうだよね?」

……穂乃果ちゃんが、僕に……？

「穂乃果見ちゃったんだよねー、君のその机の絵」

「……………」

今の僕の机には授業中に描きながっているアニメのヒーローや、想像上のキャラなんか書かれている。

見られていた——穂乃果ちゃんに。

「あの絵、全部君が描いてるの？」

ああ……また笑われるんだろうな……………

「……………うん、そうだよ」

しかし穂乃果ちゃんの返答は、またもや僕の予想外で——

「すごーい!!上手っ!穂乃果、そのマンガ大好きなんだ!」

「え……………?」

「そのマンガ、連載し始めの頃からずっと好きなの!単行本も一巻から全部買ってるよ」

!」

へへへ、と穂乃果ちゃんは笑って僕にVサインをして見せた。

「……マンガ、好きなの？」

「うん！家にたーくさんあるよ！……みんなにはあんまり言つてないから、ナイシヨね？」

今度は照れたように穂乃果ちゃんは笑い、人差し指を自分の口元にあてがう。

しかし残念ながら、昼休み終了を告げるチャイムが無情にも鳴り響く。ああ、夢のような時が終わる……

と思いきや。

今日の運命の神様は完全に僕の味方らしい。

「ああ……チャイムなっちゃったかあ……」

ねえ、今日一緒に帰ろうよ！

「……えっ!？」

「まだ君と話したいことがたくさんあるから！

それじゃまた後でね——佐伯くん！」

最後になつこりとはにかんで、穂乃果ちゃんは自分の席へと戻っていった。

僕はそれを啞然として見届けて、机に突っ伏した。

初めて穂乃果ちゃんに——名前を呼ばれた。

きつと僕は今、他人には見せられない顔をしている。真っ赤でニヤニヤとして……さ
らにクラスで浮くこと間違いなし。

夢じゃ——ないよね？

夢なら覚めないでほしい。何でもするから。

放課後になれば……穂乃果ちゃんと。

普段から早く家に帰りたくてたまらない僕だけど、今日ほど早く授業が終われと望んだ日はなかった。

この日から少しずつ

僕の運命は動き出す

【高坂穂乃果】ヒーロー#3

【高坂穂乃果】ヒーロー#3

僕に起こる奇跡

その奇跡を起こすピースは

ほんの一欠片の勇気だと気づくのは

もう少し先のお話

キーンコーンコーンコーン……………

終業を告げるチャイムが鳴り響き、教室は一気にざわつき始める。

しかし僕の心の中のざわつきはこんなもんじゃない。5、6時間目の授業の内容なんて上の空、僕はただただ学校が終わるこの時を待ち続けていた。

—— 『今日一緒に帰ろうよ!』 ——

その言葉が現実だといまだに信じられない自分もいるけど、これは紛れもない事実。想いを寄せる穂乃果ちゃんから直々に帰りを共にする提案を受けたのだ。

しかしここからどうするのだろう。

確かに帰る約束はしたけど、待ち合わせ場所なんかは全く決めてない。さすがに教室から一緒に帰るなんて目立つことはしないだろうけど……

そんなことしたら、僕はいいけど穂乃果ちゃんに迷惑をかけてしまう。

「じゃあね穂乃果!」

「うん、バイバイ! また明日ね!」

クラスメイトに笑顔でさよならをしている穂乃果ちゃん。そこからどうするのだから

うと思っていると……

彼女はおもむろに僕の方へと歩み寄り――

「――さ、帰ろっ!」

笑顔で僕へと語りかける。

その瞬間、教室に静寂が訪れた。

……あ、そんな感じで行っちゃおう?

ストレートな感じで行っちゃおう感じ?

ま、穂乃果ちゃんがいいならいいけどさ。

内心は周りの男子の刺すような視線と女子の奇怪な視線を向けられて冷や汗をかいていたけど、そこは鍛え上げられた鉄ポーカーフェイス面皮で誤魔化し抜いた。

「……う、うん、行こっか」

「えへへっ♪」

その笑顔を見ると、穂乃果ちゃんも僕との帰りを楽しみにしてたのかな、なんて。

……明日からどうなるんだろ、教室での僕。

そんなことを考えながら先導する穂乃果ちゃんの後について居心地の悪い教室を後

にした。



校門を出て、幸運にも同じらしい帰り道を2人で並んで歩く。穂乃果ちゃんはどうやら誰かとマンガについて話したかったみたいでその友達が女の子にはいなかったらしい。ここぞとばかりに嬉々として僕に語ってきた。

僕もマンガの知識に関してはクラス1……いや、下手すれば学校1の自信があるので穂乃果ちゃんが語るマンガの内容は僕も知っていて話が弾んだ。

「はー、やっぱりマンガを知ってる人と語るのは楽しいっ！君と一緒に帰れてよかったよー！」

穂乃果ちゃんは本当に嬉しそうに笑っていて、僕も思わず笑顔になってしまった。

まるで夢のような時間。出来るならずっと——

「……あ、穂乃果がこんなにマンガのこと話しちゃって、ひいたりしなかった…?」「ううん、全く。むしろ好感持てたかな」

「ほんと?よかったよかった!」

「……じゃあ、穂乃果こっちだから」

目の前に広がる2つの道。
ここで僕の夢の時間は終わり。

——にしたくなかった僕は。

「……ねえ、高坂さん」

「ん？どうしたの？」

「……もう少し話して帰らない？」

勇気を出して、提案してみる。

すると穂乃果ちゃんはニコリと笑い——

「うん！穂乃果ももう少し君と話したい！」

「……ありがとう」

「じゃあ、穂乃果の家まで送ってくれる？」

「……えっ!？」

「ダメ、かな……？」

「い、いや、僕は全然構わないんだけど……」

高坂さんはいいの？」

「うん！むしろそうしてくれたら嬉しいな！」

……僕は今日死ぬのだろうか。

1日に幸運が訪れすぎて、そんな錯覚を及ぼす。

穂乃果ちゃんと帰れるだけじゃなく、穂乃果ちゃんの家にも……!」

1人だったら確実に人には見せられない顔になっていただろう。しかし僕は思い人の前でそんな無様な顔は晒さない。表面上は笑顔をキープしながら、さも冷静を装って穂乃果ちゃんに返事をした。

「ありがとう。……じゃあ、行こうか」

「うんっ！」

そして2人は歩き出す。

先程までと同様に、好きな漫画の話に花を咲かせながら。

しばらくして話は落ち着き、話題はお互いの事へと移る。

「高坂さんのそのリボン……可愛いね」

「えっ、これ？」

そう言っただけで彼女は、右側にサイドアップで上げられた髪を束ねている黄色いリボンに触れる。

「そうそう。よく似合ってるよ」

「ありがとうつ。……これね、大切な友達がくれたの。一緒の高校行く約束してたんだけど、穂乃果は落ちちやって……」

えへへ、と穂乃果ちゃんは笑って見せたけど僕の方はそうもいかなかった。正直、話題を失敗したときえ思った。しかし当の穂乃果ちゃんは笑顔で話を続ける。

「……そしてその友達が、このリボンをくれたの。『離れてても繋がってるからね』って！

だから似合ってるって言ってくれて嬉しいな！

ありがとう！」

「高坂さん……ごめんね、辛い話させちやって」

「ううん、全然大丈夫！穂乃果もう気にしてないから！」

本人が本当にそう思っているかはわからない。

ただ、1つ確かにわかるのは……

穂乃果ちゃんはそのリボンを大切にしていること。

「ねえ！佐伯君は自分で漫画描いたりしないの？」

「えっ、僕？……まあ、少し、だけ……」

「えー書くの書くの!?すごーい!!」

「い、いや、別に大したことじゃ……」

そう、幼い頃からヒーローに憧れ続けた僕は、自分の思い描くヒーローをストーリーリーにしてマンガを描いている。

マンガは僕の唯一と言っていい特技で、客観的に評価しても面白い……いや、悪くはない。はず。

そして描き上げたマンガをスキャンしてPCに取り込み、WEBで発表する。これが僕のネット上での顔。幸いにも僕のマンガは面白いと評価してくれる人が居てくれるので、僕は現実では得られない充実感をこの趣味で得ている。

「穂乃果、佐伯くんが書いたマンガ、見てみたいな！」

「えっ!?!いや、そんな人に見せられるものじゃ無いから……」

「……ダメ？」

穂乃果ちゃんが上目遣いでこちらを見てくる。

……そんな目をされたら僕は。

「……嫌だなんて言えないよ……」

「やったあ！楽しみ楽しみー！へへへっ♪」

僕がOKを出すと、穂乃果ちゃんは心から嬉しそうに喜んだ。その笑顔が見れただけで僕がOKした甲斐がある、つてもんだ。

幸いにも、あと数ページで書き上がる作品があるし、それを完成させて……

「……ねえ！佐伯くん！」

穂乃果ちゃんが立ち止まったので僕も立ち止まる。

「ん？どうしたの？」

すると穂乃果ちゃんは唐突に僕の顔の目の前に小指を差し出した。何を以てそんなことをしているのか、頭の理解が追いつかず僕は首をかしげる。

「——指切りだよ！」

「指切り……？」

「うん！絶対マンガ見せてくれる、って！」

—— // 指切り”、か。

何年ぶりだろうか。そもそも友達と指切りをした記憶が無い。

……高校生にもなって、という考えが一瞬よぎったものの、穂乃果ちゃんは本気だ。迷う必要なんて無い……それこそ穂乃果ちゃんに失礼というものだろう。

そして僕も小指を差し出し、互いの指を組み交わす。初めて触れる女の子の指は、とても柔らかかった。小さくて細くて、守ってあげたくなるほど儂くて……

「ゆーびきーりげんまーん……」

目を閉じて歌う穂乃果ちゃんの表情に見惚れる。

勢いでやってしまったことに多少の恥ずかしさを感じているのか、ノリノリで歌っているように見えるけれども、その頬は先ほどよりも確かに赤い。

「……ゆーびきった！はい！約束だからね！」

穂乃果ちゃんが解くことで離れた指。

それに少しだけ名残惜しさを感じながらも、それ以上に感情を支配する恥ずかしさに勝つことは出来ずに僕は彼女から視線を外した。

「……ねえ、高坂さん」

「ん？どうしたの？」

「今日……何で僕を選んだの？」

「え？」

「マンガ好きな人なら僕の他にもいたんじゃないの？それにほら……僕はクラスでも……浮いてるし、ね」

……自分の言葉に傷ついてちや世話ないな。

僕は自分を嘲笑するように言った。

しかし穂乃果ちゃんは——

「——そんなことないっ！」

「えっ……？」

「ほ、穂乃果は……き、君が……」

「こ、高坂さん……?」

「……君と帰リたかつたのっ! それじゃ……ダメ……?」

……やばい。

嬉しすぎて、空へと飛んでいきそうだ。

「あ、ありがとう……」

「もう! こんな恥ずかしいこと言わせないでよう!」

本気で恥ずかしかったのだろう、先程よりも遥かに頬を染めてプイツとそっぽを向いてしまった穂乃果ちゃん。

「……ご、ごめん……」

「……ねえ。佐伯くんはどうしてマンガを描こうと思ったの?」

「……そう、だね……”なりたかつた”んだ」

「なりたかつた?」

「ヒーローに。小さい頃からそれがずっと夢で。

でも、気づいちゃったから。僕は力も弱いし、泣き虫で、勇気もない。……ヒーロー

になんかなれない、って。だから僕は描き続けている。自分が憧れた、自分がなりたかったヒーローを。

……それぐらいしか出来ないから」

……何を聞かせてるんだろうか。

自分の弱音を、本音を漏らしてしまった。

誰にも聞かせるつもりもなかったこの思いを聞いて、穂乃果ちゃんは思っただろう。

……きっと幼稚だ、とか弱虫だとか、幻滅しただろうな。……幻滅しうるほどの信頼を得ていたのか自信もないけれども。

しかし返ってきた言葉は、僕の想像だにしない言葉で。

「——大丈夫だよ」

「え？」

「——君ならなれるよ。自分が描いた、自分だけのヒーローに」

「……高坂、さん……?」

僕の呼びかけに返事はなくて。

穂乃果ちゃんはニコリと微笑んだ。

「……じゃあ穂乃果の家ここだから」

「えっ……」

穂乃果ちゃんが立ち止まったのは、近所でも有名な和菓子屋さんだった。

「……この店、高坂さんの家だったんだ……」

「えっ! 知ってるの!?!」

「うん。ここの和菓子美味しいからよく買いに来るよ」

「わあ! そうなんだ! じゃあ今までに会ったことがあるのかもね!」

「……かもしれないね」

口ではそういったもののそれはないだろう。

だってもし見たことがあるのなら……その時に僕は君に惚れていたはずだから、ね。

「今日はありがとう! 楽しかったよ!」

「うん。僕も楽しかった」

「……ねえ」

「ん？」

「次はウチに遊びにおいで！」

「……………多々？」

「それじゃあまた明日ね！佐伯くん！」

ガチガチに固まってしまった僕を残して、穂乃果ちゃんは家の中に入っていった。残された僕の中にはいろいろな思いが渦巻く。

和菓子屋…………穂乃果ちゃん…………次…………ヒーロー…………穂乃果ちゃん…………

うまく回らない頭の中で暫定的に導き出した答えは

とにかく僕は、穂乃果ちゃんが、大好きだ。



「ふう……」

あれから僕は学校が終わるとすぐに家に帰り、自分の部屋で机に向かい合い、作業に没頭していた。

その作業とは……マンガ。

完成しかけのものを放っぽりだして、新たに一からマンガの作成へと取り掛かっている。

今までは高嶺の花だって諦めてた。

でもそれじゃ僕はきつと僕のままだ。

心の中では諦めてたけど……

やっぱり僕は穂乃果ちゃんと、恋人になりたい。

立場が、欲しい。友達としてじゃなく、ちゃんとした理由を持って彼女を守る立場が。

だから僕は、それ相応の“マンガ勇氣”を作って、彼女に想いを届けよう。

何も無い僕が、唯一できる何か。

それがマンガだから。

穂乃果ちゃんは、何と言ってくれるだろうか。

僕のマンガを見て、笑ってくれるだろうか。

「……ふふっ」

僕らしくもないとわかっていながら、期待せずにはられない。

「……よしー！」

声と共に気合を入れ直し、僕は目の前の作業へと取り掛かった――